

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ニーチェにおけるニヒリズム克服とその現代的意義
Author(s)	安田, 慧
Citation	HABITUS , 27 : 267 - 284
Issue Date	2023-03-20
DOI	
Self DOI	10.15027/53738
URL	https://doi.org/10.15027/53738
Right	
Relation	



ニーチェにおけるニヒリズム克服とその現代的意義

安 田 慧

(広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程前期 2 年)

はじめに

われわれは、自分自身や他の人間、あるいは自分を取り巻く世界の現実に対して、逃げることなく真っ向から立ち向かえているだろうか。そうでないとするれば、どうすればいいだろうか。本稿では、この問いに対する一つの答えを、ニーチェにおけるニヒリズムとその克服のありように対する考察を通して探る。

第一章 ニーチェにおけるニヒリズムについて

第一節 二つのニヒリズムの概要とそれらの関係

ニーチェ¹⁾においてニヒリズムは、キリスト教との関係性によって大きく二つの意味に分かれる。一つは、キリスト教的道徳観・価値観が支持されなくなったこと。これは「神の死」あるいは「価値喪失」としてのニヒリズムと呼ばれる。もう一つは、キリスト教的道徳観・世界観そのもの。これは「無への意志」としてのニヒリズムと呼ばれる。

「価値喪失」としてのニヒリズムとは、キリスト教的な世界観・価値観・神概念が、ヨーロッパ文明にとって信仰の対象ではなくなったこと（「神の死」）によって引き起こされた、無意味性の感覚を指す。長い時を共に過ごした「神」や道徳は、人々にとって世界に対する唯一の解釈となるまでの影響力を獲得していた。その解釈の維持に失敗したヨーロッパ文明は、ひとつの大きな「指針」

を失ってしまう。「ニヒリズム。すなわち、目標が欠けていること。『なぜ?』に対する答えが欠けていること。」²⁾。そしてその結果、今度は世界を「絶対的な非道徳性、没目的性と無意味性」³⁾をもつものと考えようになったという。ニーチェは、このような事態を引き起こしたのは、基督教の影響で大きく育まれた「誠実性」、すなわち科学的世界観であるとしている⁴⁾。だが一方で、ニーチェはこの「価値喪失」としてのニヒリズムを好意的にとらえてもいた。なぜなら、「価値喪失」としてのニヒリズムはそれまでヨーロッパ文明を蝕んできた基督教の支配を逃れる絶好の機会でもあったからである。ニーチェにとって「価値喪失」としてのニヒリズムは、基督教的道徳観・世界観の否定という意味で「一つの正常な状態」⁵⁾でありつつも、いまだ新たな価値は創造されていない「中間状態」⁶⁾としては克服の対象でもあった。

それと同時に、ニーチェは基督教的道徳観・世界観そのものも「無への意志」としてニヒリズムであるとしている。この場合の「無」には、基督教とそれを打倒するきっかけとなった科学も含まれている。というのも、宗教的な「神」への信仰も、科学的な「真理」への傾倒も、何か絶対的で人間の力ではどうしようもないものの存在を仮定しているという点では同様だとニーチェは考えていたからである。こうした仮定あるいは捏造、つまり「無＝ニヒル」を希求するから「無への意志」はニヒリズムなのである。そしてニーチェによれば、こうした基督教の「神」や科学的「真理」への信仰、すなわち絶対性や客観性への信仰は、最終的に現実世界と生の否定につながるという⁷⁾。その意味で、ニーチェにおける「無への意志」とは、現実世界とそこでの生とを否定しようとする意志でもあった。

ではこれら二つのニヒリズムはどのように関係しあっているのか。「価値喪失」としてのニヒリズムのきっかけとなったのは科学的世界観であるとニーチ

エは考えていた。これは科学的「真理」への意志が、キリスト教的「神」への意志を排除したということを意味している。つまり、新しいバージョンの「無への意志」が古いバージョンの「無への意志」を排除してしまったのである。ニーチェにおいて、「価値喪失」としてのニヒリズムと「無への意志」としてのニヒリズムは、「無への意志」としてのニヒリズムが、「価値喪失」としてのニヒリズムの根本的な原因になる、という形で関係しあっていると言えるのだ。そのため、真にニヒリズムを克服するには、「価値喪失」としてのニヒリズムの奥にある「無への意志」としてのニヒリズムを克服しなければならないのである。

第2節 ニヒリズムとキリスト教的道德観・世界観の関係についての考察

ニーチェにおけるニヒリズムとキリスト教的道德観・世界観は、非常に密接に関わっている。以下では、第三章での議論も視野に入れつつニーチェにおけるニヒリズムとキリスト教的道德観・世界観の関係を論じる。

まず、キリスト教的道德観・世界観はニヒリズムにおいて一つの「指針」としての役割を担っている。「価値喪失」としてのニヒリズムは、実はこうした役割によってもたらされた一種の帰結とも考えることができる。「価値喪失」のニヒリズムでは、キリスト教的道德観・世界観を維持できなくなったこと自体がニヒリズムと見なされていたが、そのきっかけをもたらしたのは、キリスト教的道德観のなかで育まれた「誠実性」であった。「誠実性」が、キリスト教的道德観のなかで当のキリスト教的道德観・世界観を突き崩すことになるほど研ぎ澄まされた、というこの現象自体が、ヨーロッパ文明がキリスト教的道德観・世界観を「指針」に据えていたことを表していると言える。

キリスト教的道德観・世界観は、また、ニヒリズムにおいて生における苦し

みを軽減するあるいは取り除く「手段」となることでニヒリズムを深める「手段」となるという役割を果たしている。例えばキリスト教では、人間は死んだ後も神の下で永遠の幸福な生を享受できるという。ここでは、死が一時的な睡眠状態に解釈しなおされていて、そのことによって死の重大さとその苦しみが軽減されていると言える。また、死後われわれが神のもとで享受する生は幸福なものだということを強調することによって、死の苦しみから目を背けさせようとしているとも言える。

ニーチェは、キリスト教をそうした「幸福を求め、苦しみを遠ざけようとする」在り方を正当化する手段として捉えていた。例えば『道徳の系譜』において、ニーチェはキリスト教的道徳が無力さとそれに由来する苦しみから目を背けることを正当化する様子を描いている。

抑圧された者、蹂躪された者、暴圧された者らが、無力なるがゆえの復讐に燃えた奸計からして、「われわれは悪人とは別なものに、つまり善人になろうではないか（中略）」——と言って自らを慰めるが（中略）これは冷静に先入見なしに聞いたとしても、もともと、「われわれ弱者はどうせ弱いんだ。われわれは自分の力の及ばないことは何一つしないのが、われわれの善いところなのだ」というだけのことにすぎない⁸⁾。

自分の力以上のことをしないということは、自ら成長の機会を手放すということである。だが、キリスト教ではその「自ら成長の機会を手放すこと」が称賛の対象となる。そうなれば「弱者」はもはや積極的に苦しみを乗り越えようとする代わりに、より苦しみを遠ざけようとするようになる。こうした考え方によって、人間はキリスト教を信仰することを通じて弱くなり、その結果ます

ますキリスト教を信仰するようになるという負のスパイラルが形成される。

第2章 ニヒリズムの克服

第1節 ニヒリズムの克服としての永劫回帰思想

ニーチェにおいてニヒリズム、特に「無への意志」としてのニヒリズムは、克服の対象である。本節では、「永劫回帰」という概念を中心にニーチェにおけるニヒリズムの克服について論じる。

生存はそのあるがままの形で見ると、意味も目的もない、しかし必ず繰り返される、無という終局もない。「永劫回帰」だ。

これこそニヒリズムの最も極端な形態である。無（「無意味」）が永遠だということなのだ⁹⁾！

この箇所では、ニヒリズムと永劫回帰思想の関連性が述べられている。それによれば、「永劫回帰」とは「何らの終局をも持たないこと」だということ。永劫回帰思想においてニーチェは、「目的」や「意味」などのある種の「結果」の存在を拒否する。

こうした永劫回帰思想は、どのような意味でニヒリズムの克服とつながるのだろうか。ここでは、永劫回帰思想における「結果の拒絶」、すなわち「確定的・理想的状況の拒絶」が重要な役割を果たす。確定的・理想的状況というのは、ニーチェにおける「無」である。例えば、「救済」においては、幸福という理想的な確定状況に、永遠にとどまることができる。永劫回帰思想は、こうした「無」が存在することを否定する。それによって、「無への意志」を無力化するのである。そして、永劫回帰思想はそれと同時に「無限の過程を生きること」を強制

する。

では、「無限の過程を生きること」はニーチェにおいてはどのような意味を持っているのか。

真理は存在しないということ。事物の絶対的性質、「物自体」など存在しないということ

——このこと自体が一種のニヒリズムであり、それも最も極端なニヒリズムに他ならない。このニヒリズムは事物の価値を次の一点へと置きいれる。(中略) 実在性とは価値定立者の側の力の徴候に過ぎない(中略) という一点へ¹⁰⁾。

ここでの「力」とは「力への意志」というときの「力」である。ニーチェにとって「力への意志」は「生長に対する本能」¹¹⁾である。そのため、「力への意志」はどのような状態においても、「完成」する、すなわちある一定の形に落ち着くということがない。「力への意志」とは常に過程のなかにあるのだ。

永劫回帰思想とは、「理想的な確定状況」を拒否し「無限の過程を生きる」という意味で、ニヒリズムの克服であった。キリスト教的道徳観・世界観から力を奪ってしまった張本人である「科学」でさえ、「自然の絶対的非道徳性、没目的性と無意味性への信仰」¹²⁾というそれ以上動かしようがないという意味で一種の完成された状況を志向している。だからこそニーチェは「科学」を斥けた。そして対照的に、「無限の過程を生きる」ためにニーチェが重要視したのが、「力への意志」であった。

第2節 「超人」概念の内容と「超人」におけるニヒリズム克服についての考察

ニーチェにおいて「超人」は、直接的には「おしまいの人間」と対比される。ニーチェは、「おしまいの人間」を現実世界での生を取り返しのつかないほど腐らせてしまう存在とする¹³⁾のに対し、「超人」を現実世界で生きる意味の体現者とする¹⁴⁾。そしてニーチェは、このような「超人」を「目標」にすべきだと述べている¹⁵⁾。ではいかなる理由で、「超人」は目標となるべきなのか。

わたしはきみたちに超人を教える。人間は、超克されるべきところの何ものかである。きみたちは人間を超克するために、何をなしたか？

従来あらゆる存在者は自分を超越する何ものかを創造した¹⁶⁾。

「自分を超越して創造すること」、これは言い換えると自己克服であり「価値創造」である。そしてこれは、ニーチェの考える生の本来の在り方そのものである。というのも、ニーチェにとって生は「自分自身を超克しなければならない」ものだからである。生の本来の在り方を体現しているからこそ、ニーチェは「超人」を目標にすべきと考えたのである。そしてニーチェはこういった生き方にこそ、健やかな「力への意志」を見出す。

では、「超人」の在り方はどのような意味でニヒリズムを克服したと言えるだろうか。「力への意志」の文脈から考えれば、「無への意志」はその裏に、屈折した「力への意志」が隠されている¹⁷⁾のに対して、「超人」における「力への意志」はそうした屈折から解放され、「自己克服」という形で本来的な「力への意志」を発揮できるようになっている。また、「超人」は、「中間状態」としてのニヒリズムを克服していると言える。なぜならば、「中間状態」が克服の対象と

されたのは、それが従来の価値を破壊するだけで、新たな価値を生み出すには至っていなかったからである。「価値創造」によって「超人」は「極限的ニヒリズム」の渦中を生きることができる。そしてここにおいて、「永劫回帰」あるいは「極限的ニヒリズム」を肯定しようとする存在としての「超人」という在り方が立ち上がってくる。「超人」を「超人」たらしめているのは、絶えざる自己克服なのである。

第3節 「超人」とその類似概念との比較

(1) 金髪の野獣

「超人」に関して、しばしばそのモデルとされるのが「金髪の野獣」である。例えば、宮原浩二郎(1991)は、「高貴な身体」という概念を介在させることによって、「超人」と「金髪野獣」を結び付けている¹⁸⁾。また、後藤雄太(2021)においても「超人」と「金髪の野獣」が結び付けられている¹⁹⁾。

だが、新名隆志(2002)によれば、「金髪の野獣」と「超人」の相違点は、まず「金髪の野獣」は「弱者」の支配者であるが、「超人」は「おしまいの人間」の支配者ではないこと、そして、ニーチェにとって「金髪の野獣」は過去の具体的な種族であるが、「超人」はいまだ存在したことだという。またニーチェにおいて、「超人」は永劫回帰の肯定において初めて存在する、「未来の目標」として設定されていると新名は述べている²⁰⁾。

付け加えるならば、「力への意志」で重要なのは、それが「自己肯定の意志」であるとともに「自己克服への意志」であるということである。それと異なり「金髪の野獣」においては弱者に対する支配²¹⁾や一回きりの「自己肯定」といった側面が強調されているのみである。

「金髪の野獣」における正常な「力への意志」と「自己肯定・生肯定」的な

在り方は、「金髪の野獣」を「超人」のモデルとする根拠となりうる。しかし「超人」は、「弱者」を支配せず、過去の種族がモデルとなっているわけでもない。なにより「超人」は「自己肯定」を超えて「自己克服」をなす存在なのだ。

(2) 子ども及び子どもにおけるニヒリズムの克服

「子ども」は「超人」と同じくニヒリズムを克服した在り方と考えることができる。ニーチェによれば、「子ども」とは、「ラクダ」・「シシ」という言葉で象徴される精神の形式を経て最後に実現する形式であるという。「ラクダ」という形態では、精神は「重荷」、つまり自分自身が服従すべき既成の価値を求める。

「内に畏敬を宿す精神、強くて、重荷に耐える精神にとっては、多くの重いものがある。」²²⁾。そうして種々の価値を受け入れた「ラクダ」は、生来の住処である「砂漠」で、自分が引き受けたものの重みに耐えようとする²³⁾。しかし、この「砂漠」において「ラクダ」は「シシ」へと変化する。そして「シシ」は「ラクダ」のように、諸価値に対してただ服従するのではなく、むしろそういった価値つまり「なんじ、なすべし」という道德規範に対して積極的に戦いを挑み、自分自身を解放しようとする。そして「シシ」は「われ欲す」の衝動に従い、それまで自分が従っていた規範をもはや絶対視しなくなる²⁴⁾。そして、その上に自分自身が価値を創り出すための、いわば真っ白なキャンバスを獲得するのである。

こうした一連の過程を経て最後に登場するのが、「子ども」である。「子ども」には、「シシ」の段階で獲得した自由の上に、新たに何ものかを創造することができる、とニーチェは言う。

シシもなしえなかった何ごとを、子どもはさらになしうるのか？（中略）
子どもは無邪気そのものであり、忘却である。一つの新しい始まり、一つ

の遊戯、一つの自力で転がる車輪、一つの第一運動、一つの神聖な肯定である。そうだ、創造の遊戯のためには、私の兄弟たちよ、一つの神聖な肯定が必要なのだ。いまや精神は自分の意志を欲する。世界を失った精神は自分の世界を勝ち得るのだ²⁵⁾。

自らが欲さないものを否定してあらゆる束縛からの脱出しようとする「シシ」には否定の対象が必要であるのに対して、「子ども」にはもはや否定の対象となる存在は必要ない。「子ども」はただ遊戯をするように自分の世界を創造するのである。

では、この「子ども」はどのような仕方でニヒリズムを克服するのだろうか。後藤(2017)によれば、「子ども」における「自己超克」は、「脱自」という表現がふさわしいようなものであるとしている。そしてこの脱自の境地において、「子ども」に訪れるのは、意志によって強引に獲得されたような「肯定」ではなくて、おのずから立ち現れてくる本当の意味で「神聖な肯定」なのだと後藤は言う。ここから分かるのは、「子ども」において、ニヒリズムの克服は「意志」の力によって無理やりなされるのではないということである。そうではなくて脱自によって、すなわち自己と世界という二元的な世界観を脱却することによって、ニヒリズムの克服がなされるのである²⁶⁾。

ニーチェにおいて「子ども」と「超人」は、どちらもニーチェにおいては理想の在り方として語られている。しかし、「超人」と「子ども」とは、ニヒリズムの克服の仕方という点においては大きく異なっている。「超人」とは、永劫回帰「を」肯定する者、つまり永劫回帰の中で、自己克服、すなわち否定することによる破壊を契機とした肯定という名の創造を志向する存在なのだ。「超人」は自己について問うことをためらわない。だが、そこには依然として「自己と

他者」という二元論的な思考が存在し続けているように見える。それに対して、「子ども」になった精神は、そういった二元論的な緊張状態を脱した「脱自」の境地に至っている。創造と忘却を繰り返すことは、ある面では自己克服と言えるだろう。しかし、「子ども」はそれを「遊戯」のように行う存在である。自己克服と意識することなく自己克服をなす存在であり、「子ども」にとって自己克服は目的ではない。むしろ「遊戯」のように忘却とともに創造することが、意図せず自己克服となっているだけなのである。

「超人」と「子ども」はどちらの概念も生の本来の在り方を取り戻そうと考えたニーチェの理想を表現している。しかし「超人」が「自己克服」によってニヒリズム克服を目指そうというのに対し、「子ども」においてはニヒリズムの克服はむしろ「遊戯」の副産物、すなわち忘却の副産物とでもいうべきものであった。こうした「子ども」との対比からも、「超人」が「自己克服」をなす存在であるということが浮き彫りになってくる。

第3章 ニヒリズム克服の試みとその現代的意義の考察

本章では、現代人が自己自身から逃避することなく立ち向かうためには、どうあるべきかについて論じる。ニーチェは、「超人」や「子ども」という概念を、現実と向き合う苦しみから逃避する在り方の対極として提示した。それゆえ、「超人」と「子ども」という概念は、ニーチェにおいてはどちらも理想とすべき在り方であるが、本論文では、「超人」を軸に考えている。その理由は、「子ども」において「苦しみを苦しみとして感じ取る」という在り方が見えにくいことにある。先にも述べた通り、「子ども」が「脱自」の境地にある存在であると言える。別の言い方をすれば「自他」という二元論的な緊張状態にない状態である。このような在り方は、確かに理想的なものかもしれないが、すぐには

共感しがたいものなのではないだろうか。だが、「超人」の自己克服には、苦しみを正面から受け止めるという意味合いも含まれていた。ここに、われわれ現代人が学ぶべき何かがあると思われる。

第1節 テクノロジーとキリスト教的道德観・世界観のアナロジー

ニーチェにおけるニヒリズムでは、キリスト教的道德観・世界観は、まず人々の生き方の「指針」としての役割を担っていた。テクノロジーについても同じことが言える。われわれが生きているのは、テクノロジー全盛の時代であり、テクノロジー至上主義の時代である。新たな神の座に就いたテクノロジーが人類全体の「指針」となり、テクノロジーによって実現される世界が理想の世界と見なされるようになってきているのではないだろうか。

また、キリスト教とニヒリズムは、キリスト教が苦悩を回避するための手段として用いられることでニヒリズムを深めるという関係性を持っている。人が「神」を志向し、「真の世界」を志向し、もっと広くは「客観性」を志向するのは、そうしていれば、現実世界に生きることで感じる苦しみを和らげることができるからである。安全・安心な状況に少しでも近づけるのである。そしてテクノロジーにおいても事情は同様である。ノーレン・ガーツによれば、われわれ現代人はテクノロジーによって「人間である意味」、「決断とそれに伴う責任」、「自分の無力さ」、「個としての弱さ」といった苦しみの諸原因を遠ざけようとしているのだという²⁷⁾。例えばガーツによれば、われわれはテレビや You tube、ストリーミングサービスなどを見ることで「自己催眠」状態に陥り、自己催眠にかかっている間、つまり何も考えずに動画などを見ている間、自分が「人間である意味」を考えないようにしているのだという²⁸⁾。このように、テクノロジーは日常の多くの場面で、苦しみを遠ざけるための手段として用いられてい

る。

以上のようなガーツの指摘において、「過程を軽視し結果のみを重視する」という傾向が見て取れるのではないだろうか。先の「自己催眠」の例においては、われわれは現実世界における苦しみに向き合うという過程を軽視どころか省略して、テクノロジーがもたらす「真の世界」、すなわち安楽なバーチャル世界へと向かおうとしている。テクノロジーはわれわれ人間の「過程を軽視し結果のみを重視する」傾向、言い換えれば、過程における苦しみを無視し結果が与える幸福のみを得ようとする傾向・要望（キリスト教における救済のように）に応えてくれる。だが、それに慣れすぎれば人間として本来あるべき姿から遠ざかってしまうのは想像に難くないだろう。

第2節 「超人」概念を基にした現代的ニヒリズムの克服についての考察

テクノロジーはわれわれの生活を「豊かに」あるいは「便利に」する一方で、われわれにありのままの現実世界に立ち向かうことを難しくさせもする。したがって、テクノロジーによるニヒリズムを克服するために直感的に出すことのできる答えの一つは、テクノロジーと物理的あるいは心理的に距離をとる、ということである。テクノロジーと距離をとることは、「神」の座からテクノロジーを引きずり下ろすことにつながるかもしれない。だが、問題はむしろそこからである。ニーチェのテキストにしたがえば、われわれは「神」を失ったとき、「価値喪失」に陥る。そしてまた、ニーチェのテキストによれば、そのとき明らかになるのは、現実世界での否定しようとする欲求である。ニーチェは真の強者の基準をどれだけ偶然を許容できるかに求めた²⁹⁾。これはどれだけは無意味さに耐えられるかということでもある。病気や死、あるいは老い、そしてそこから生じる苦しみにも、究極的には意味などない。しかし、ニーチェの思想

に抛るならば、真の強者とは、病気や死、老い、そしてそこから生じる苦しみに意味がないと理解したうえで受け入れられる者のことである。テクノロジーとの関係で言うなら、「どれだけテクノロジーを苦しみを遠ざけるための手段として使わないか」ということである。

テクノロジーはわれわれをわれわれ自身から遠ざける。テクノロジーが発展した社会では、極論を言えば人間は何もできなくてよい。人間ができないことはテクノロジーが肩代わりしてくれる。人間にできることでもテクノロジーの方がより正確に、より迅速にできてしまう。だがここには「結果をすぐに手に入れるために、過程を省略しよう」という姿勢が存在するのではないか。それに対し、「超人」とは、自己克服する者のことである。従来の価値を疑い否定し、同時に新たな価値を創造する者のことである。これは、例えば偏差値や経済成長といった「量的増大」、「量的変容」とは異なる「質的変容」ともいうべきものである。しかし、例えばその従来の価値の克服が一回きりで止まってしまったら、それは「超人」の在り方とはおそらく言えない。ニーチェにおける「超人」の在り方を、「自己克服」の語義の通り厳密に解釈するならば、「超人」はつねに価値を更新していく存在である。「超人」にとっては、自分が創り出した価値でさえ、既存の価値と同様、更新されるべき対象となるのだ。ここには、現代社会の主たる風潮とは異なる、「自問自答する在り方」が見て取れる。

ニーチェの言う「超人」の在り方から何か意味を引き出すことができるのだとすれば、その一つはすぐに結果ばかりを求めず過程を重視することだろう。これはすなわち、自問自答をいとわないことである。「自己克服」をなすためには、われわれは自己について問わなければならない。そして自己について問うためにはテクノロジーによって遠ざけられた自己を再び近づけてこなくてはならない。自問することに苦しむプロセスを忘れない人間が、現代における「超

人」であり、こういった苦しみに真正面から立ち向かうというのが、ありのままの現実世界から逃避することなく生きることにつながってくるのではないだろうか。

註

1) ニーチェの著作・遺稿のテキストとして *Nietzsche Werke, Kritische Gesamtausgabe*, hrsg. von Giorgio Colli und Mazzino Montinari, Walter de Gruyter, 1967ff, Berlin, New York.を用いる。そして著作からの引用及び参照箇所を、以下に示す著作名の略号・ページ数の順で記す。また、遺稿からの引用及び参照箇所は、*Kritische Gesamtausgabe*(以下 KGA)における整理番号を記す。また、訳出に関しては、著作については理想社版全集を利用し、遺稿については、白水社版全集の邦訳を利用した。しかし、筆者が訳し変えている箇所もある。

AC: *Der Antichrist*, in *Kritische Gesamtausgabe*, VI-3.

FW: *Die fröhlich Wissenschaft*, in *Kritische Gesamtausgabe*, V-2.

GM: *Zur Genealogie der Moral*, in *Kritische Gesamtausgabe*, VI-2.

Z: *Also sprach Zarathustra*, in *Kritische Gesamtausgabe*, VI-1.

2) KGA:9[35]

3) KGA:5[71]

4) KGA:9[35]

5) 同上

6) 同上

7) FW,258-259 頁、AC,170-172 頁参照。

8) GM,294 頁

9) KGA:5[71]

- 10) KGA:9[35]
- 11) AC,170 頁
- 12) KGA:5[71]
- 13) Z,13 頁。
- 14) 同上書、8-9 頁
- 15) 同上書、98 頁
- 16) 同上書、8 頁
- 17) GM、342-343 頁、348 頁
- 18) 宮原浩二郎「「超人」のヴィジョン：ニーチェという問題」『関西学院大学社会学部紀要』63号、1991年、373-394頁参照
- 19) 後藤雄太、『存在肯定の倫理Ⅱ 生ける現実への還帰』、ナカニシヤ出版、2021年、72頁参照
- 20) 新名隆志、『『道徳の系譜』における「金髪の野獣」』『哲学』53号、2002年、197-206頁参照
- 21) GM,329-332 頁参照
- 22) Z,25 頁
- 23) 同上書、26 頁参照
- 24) 同上書、26 頁参照
- 25) 同上書、27 頁
- 26) 後藤雄太、『存在肯定の倫理Ⅰ ニヒリズムからの問い』、ナカニシヤ出版、2017年、58-59頁参照
- 27) ノーレン・ガーツ、『ニヒリズムとテクノロジー』、南沢篤花訳、翔泳社、2018年、134-333頁参照
- 28) 同上書、134-186頁参照。

29) KGA : 5[71]参照

Overcoming Nihilism in Nietzsche and Its Significance in Modern Times

Yasuda Kei

Graduate School of Humanities and Social Sciences

(Master's Degree Program),

Hiroshima University

Technology's impact on our lives has been increasing, and it is unlikely that its influence will diminish in the future, especially because technology has aspects that contribute to the development of mankind. However, the impact of technology on us also has a negative side—it often facilitates "escape from ourselves." As technology becomes increasingly prevalent, so do its negative effects. This study discusses the ways in which we can face ourselves without escaping from ourselves in the modern world, using Nietzsche's nihilism and the existence that overcomes it as clues. At that time, what plays an important role is the way of being in "*Übermensch*"—"Self-overcoming". Self-overcoming implies attempting to transcend yourself—alternatively, "self-transformation," which necessitates intrepid self-enquiry. This study concludes that fearlessness in self-inquiry will become even more significant in the modern world, where the impact of technology on human beings is continuously increasing.